

# 紫式部の物語の方法

——省略の方法について——

小 沢 恵 右

## 目 次

一、省略の方法とは

二、昔物語の方法

三、源氏物語の方法

1、何を省略したか……対象による分類

A、事物を列挙することの省略

(1)、儀式の省略

(2)、和歌の省略

(3)、その他

B、女の関与すべきものではないことこの省略

C、ストーリーを煩雑にするものこの省略

2、どのように省略したか……作者の態度による分類

A、単純省略型

B、〃いへば更なり〃省略型

C、消極的弁解省略型

D、積極的心情語省略型

(1)、〃うるさし〃系

(2)、〃かたはら痛し〃系

(3)、〃むつかし〃系

(4)、〃ことごとし〃系

(5)、〃うたてし〃系

(6)、〃煩らはし〃系

(7)、〃見苦し〃系

(8)、〃くだくだし〃系

(9)、〃さがなし〃系

(10)、〃殊更めく〃系

## 四、結語

### 一、省略の方法とは

末摘花の巻で、末摘花の装束について

着給へる物どもをさへ、いひたつるも、物いひさがなきやう

なれど、むかし物語にも、人の御装束をこそは、まづいひた

れ。  
(古典文学大系(一)、二五七12―14)

と言っている所がある。昔物語(源氏物語以前の物語)では、装束

について詳しく述べられているのを、紫式部は、「物いひさがなきやうなれ」と常々考えていたのであろう。しかし、この場合には、そう考えながらも昔物語の方法を借用したのであった。

「若菜上」に

装束、かぎりなく清らをつくして、名だかき帯、御佩刀など、故先坊の御方さまにて、つたはり参りたるも、又、あはれになん。……中略……昔物語にも、物得させたるを、かしこきことには数へつづけたれど、いとうるさくて、こちたき御なからひのことどもは、えぞ、数へあへ侍らぬや。

(古典文学大系(三)、二七四八―12)

という所がある。昔物語では、装束等で「物得させたるを、かしこきことには数へつづけた」ものを、紫式部は、「えぞ、数へあへ侍らぬや」と書かなかつたのである。紫式部は、「えぞ、数へあへ侍れできず、この場合には描写しないことよって昔物語とは違ったものを意図したのである。つまり、省略の方法を用いることにより昔物語とは異なった物語、紫式部独自の物語を作つたのである。

以下、引用例は全て古典文学大系本による。

## 二、昔物語の方法

げに、かく、賑はしう、花やかなる事は、見るかひあれば、物語などに(も)、まづ、言ひ立てたるにやあらむ。されど、くはしうは、えぞ、数へ立てざりけるとや。(「宿木」(田六五14―16))

前の「末摘花」「若菜上」ならびに、「宿木」の例を通して、紫式部の目に、昔物語では事物をたくさん「数へ立てる」と映じたことがわかるのである。たしかに、平安朝初期、中期の物語には事物が

多数書かれたのであろう。これは、物質礼讃の精神が平安朝のその頃には強かつたためであると言われている。紫式部が読んだと思われる「宇津保物語」には、特にこの傾向が強いのである。たとえ

引出物は、侍従に、様々の斑馬の、長八寸ばかり、年六ばかりなる走八馬V四、蒔絵の鞍橋、豹の皮の下鞍、銀の鎧かけたる鞍置き、黒斑の牛四、生絹のきぬをしるながら繫ぎつたり。鷹四据えたり。白き組の大袴、青き白橡の結び八垂レV、総、鈴着けなどあり。鶺鴒、籠、杖いと珍らかなり。少将に黒鹿毛の馬、長七寸ばかりなる八四、鞍、鎧オナジV。いかめしき黄牛四、鷹、鶺鴒同じ数なり。八良佐ニモマタ同じ。Vこれは主の君の御心ざし。

(「吹上」(一)三三八11―16)

となつている。

事物をたくさんならべることについて、物質礼讃の精神の他に、清水好子氏は、「物語の文体」(国語国文18巻四号)で次のように述べておられる。

事柄を文章の上に再現した、いはゞ文字づら、文章づらといつたものに於て、現実との連続を何処で可能にするかゞ竹取物語の場合、問題であつたのだと思はれる。述べられようとする事柄が一連のものである事——事実とはさういふものである——を確かめる必要があつたのである。竹取物語は全くそれを文章の上でやっている。……中略……洞物語はそれよりや、内面的になつて、ロジカルな、言ひ換へれば常識的な因果関係の中に、現実の連続を再現させようとしてゐる。……中略……物語

に出て来る或事柄が現実の世界で事実として成立する為に必要  
な条件は、文章の上に於ても物語全体の用不用を問はず書く。

……中略……一切の事件にかうした願慮が払はれてゐる為に、  
作品の冗長散漫の原因になつてゐるが、これはすべて事実らし  
くする為に必要な事だったのである。

昔物語には、南波浩氏が言われるように、怪奇なもの、神仙的な  
もの、驚異の現象を述べたものが多かった。紫式部が「ことさら  
作り出でたる」(「賢木」(一)三八一―二)とか、「をこめて作り出  
でたる」(「絵角」(四)四一六―一)と言つてゐるように、これらは現  
実とかけ離れたものであった。物語をより効果的に書くためには、  
清水好子氏の言葉借りると、現実との連続をどこで可能にするか  
が問題になるのである。昔物語では、現実のありのままの事物を用  
不用を問はず全て描写することによって、現実との連続を可能にす  
るという方法を用いたのである。

### 三、源氏物語の方法

紫式部は、先に例をあげたように「若菜上」で「昔物語にも、物  
得させたるを、かしこきことには数へつゞけためれど、いとうるさ  
くて、こちたき御なからひのことどもは、えぞ、数へあへ侍らぬ  
や。」と言つてゐる。先行諸物語が事物を多数、並べることに對し  
て、紫式部は、不満を持つていたのである。ために、彼女は、それ  
らの事物を書かなかつた。不満を解決するために省略の方法を用い  
たのである。以下、省略の方法がどのようなものであつたか、どの  
ようなものを、どのように省略したかを考察することにする。

#### 1、何を省略したか……対象による分類

##### A、事物を列挙することの省略

###### (1)、儀式の省略

(ウ)、かゝる所の儀式は、よろしきだに、いと、事多く、うるさき  
を、かた端ばかり、例の、しどけなくまねばんも、「中〜に  
や」とて、こまかにも書かず。

(「梅枝」(四)一六八―一七〇)

(イ)、(女三の御所)わたり給ふ儀式、いへば更なり。御おくり、上達部など、  
あまた参り給ふ。

(「若菜上」(四)二四六―七)

(ウ)、装束、かぎりなく清らをつくして、名だかき帯、御佩刀など、  
故先坊の御方さまにて、つたはり参りたるも、又、あはれにな  
ん。「かく」古き世の一の物と名ある限りは、みな、つどひま  
るる御賀になんあめる。昔物語にも、物得させたるを、かしこ  
きことには数へつゞけためれど、いとうるさくて、こちたき御  
なからひのことどもは、えぞ、数へあへ侍らぬや。

(「若菜上」(四)二七四―一七二)

(イ)、(朝石女御の御所)このほどの儀式なども、まねびたてんに、いと更なりや。

(「若菜上」(四)二八二―一七六)

(ウ)、げに、かく、賑はしう、花やかなる事は、見るかひあれば、  
物語などに(も)、まづ、言ひ立てたるにやあらむ。されど、  
くはしうは、えぞ、数へ立てざりけるとや。

(「宿木」(四)六五―一七五)

#### (2)、和歌の省略

(ア)、(兵部卿)……(源氏)……(主命婦)そのついでに、いと多かれど、さのみ、書き続くべき事かは。

(「賢木」(一三七八)14)

(イ)、命婦の君、御供になりければ、それも、心深うとぶらひ給ふ。くはしう言ひつゞけむに、ことごとくしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かやうの折こそ、をかしき歌など、出で来るやうもあれ。さうくしや。(「賢木」(一四〇二)16-四〇三)

(ウ)、(三中)……(源氏)……

多かめりし事ども、かうやうなる折の、まほならぬ事、かすくゝに書きつくる、「心地なきわざ」とか、貫之が諫め、たぶるゝ方にて、むつかしければ、とどめつ。(「賢木」(一四〇八)15-四〇九)

(ウ)、(源氏)……(頭中将)……(右大弁)心々に、あまたあめれど、うるさくてなん。

(「松風」(二二〇)3)

(ウ)、(源氏)……(院のう)……

(兵部卿)……(冷泉)……

これは、御わたくしざまに、うちくゝの事なれば、あまたにも流れずやなりにけん。又、かき落してけるにやあらむ。

(「乙女」(三二八)10-12)

(ウ)、軒のしづくもくるしさに、濡れく、夜ふかく、出で給ひぬ。時鳥など、かならず、うち鳴きけむかし。うるさければ、えこそ聞きも留めぬ。

(「蛩」(四二四)8-10)

(ウ)、(内大)……(夕霧)……(柏木)つきくゝに、みな、順流るめれど、酔ひのまぎれに、はかしくからで、これよりまさらず。

(「藤裏葉」(一九〇)2-3)

(ウ)、(源氏)……(尼君)……(紫上)……(明石女御)……(中務)つきくゝ、かず知らず、多かりけるを、何せむにかは聞きおかむ。かゝる折節の歌は、例の、上手めきたまふ男たちも、中くゝ、出で消えて、松の千年より離れて今めかしきこと、なければ、うるさくてなむ。(「若菜下」(三三三)8-10)

(ウ)、その夜の歌ども、唐のも大和も、心ばへふかうおもしろくのみなむ。例の、事たらぬかたはしは、まねぶも、かたはらいたくてなむ。(「鈴虫」(四八七)7-9)

(ウ)、(源氏)……(夕霧)女房など(も)多くいひ集めたれど、とどめつ。

(「幻」(四二二)5)

(ウ)、(源氏)……(導師)人く(も)、おほく詠みおきたれど、もらしつ。

(「幻」(四二二)6-7)

(ウ)、(宰相)……(薰)……(衛門の督)……(宮の大夫)……(匂宮)……

作りける文の、面白き所くゝうち誦し、大和歌も、ことにつけて多かれど、かうやうの酔ひの粉れに、まして、はかしくしきことあらんや。片はし書きとどめてだに、見苦しくなん。

(「総角」(四三三)3-5)

(ウ)、花盛りにて、四方の霞も、眺めやるほどの、見所あるに、唐のもの、大和のも、歌ども多かれど、うるさくて、たづねも聞かぬなり。

(「椎本」四三四五―6)

和歌の省略について玉上琢歌氏は、次のように述べておられる。

「こんな場合はもつともつと歌をあげるべきだと考える読者もいよう。『うつほ物語』のごときは、こんな時、かぎりもなく歌を列挙するが、そういうことをこの物語はしない。効果のある限りに止めるのだ。数の多いことが必ずしも効果を高めるとは限らない。むしろ低めることもあることをこの作者は知っているのだ。それは、おそらく漢文から得たものであろうとわたしは考える。」(源氏物語評釈)

(3)、その他

(ウ)、わざとの御学問はさる物にて、琴・笛の音にも雲井を響かし、すべて言ひつゞけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき、人の御様なりける。

(「桐壺」四三三―14)

(ウ)、ね泣きがちに、いとゞ、おぼし沈みたるは、たゞ、「山人の、赤き木の実ひとつを、顔にはなたぬ」と見え給ふ。御そば目などは、おぼろげの人の、見たてまつり許すべきにもあらずかし。くはしくはきこえじ。いとほしう、物言ひさがなき様なり。

(「蓬生」四一四五―四六二)

(ウ)、この春よりおほす御ぐし、尼そぎのほどにて、ゆらくとめでたく、つらつき・まみの薫れる程など、いへば更なり。

(「薄雲」二二〇五―6)

(ウ)、ましていとゞ、玉をしける御前は、庭よりはじめ、見どころ多く、みがましまし給へる御方々の有様、まねびたてむも、言の葉足るまじくなむ。

(「初音」三三七七―5)

(ウ)、まことや、かの見物の女房たち、宮のには、みな気色ある贈物ども、せさせ給うけり。さやうのこと、委しければ、むつかし。

(「胡蝶」四〇一―4―6)

(ウ)、かたんのひとだまひ、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束・有様、いへば更なり。

(「若菜下」三三〇―8―10)

(ウ)、けかけたる金の筋よりも、墨つきの、うへに輝く様なども、いとなむ珍らかなりける。軸、表紙、箱のさまざま、言へば更なりかし。

(「鈴虫」四七八―8)

(ウ)、寄り居給へりつる真木柱も茵も、名残匂へる移り香、言へば、いと、殊更めきたるまで、ありがたし。

(「東屋」四一六〇―12―14)

B、女の関与すべきものでないことの省略

(ウ)、「侍りつる世にもかはらず……」と、あはれなる御遺言ども、多かりけれど、女の、まねぶべき事にしあらねば、この片端だに、かたはら痛し。

(「賢木」三七五―14―三七六―4)

(イ) 【源氏】あるまじき……聖の御かどの世にも、よこぎまのみ

だれ出でくる事、唐土にも侍りける。わが国にも、さなん侍る。まして、ことわりの齡どもの、時至りぬるを。おぼし嘆くべき事にも侍らずなど、すべて多くの事どもを、きこえ給ふ。かたはしまねぶも、いと、かたはらいしたしや。

(「薄雲」(三三六三〜九))

(ウ) おとゞの御をば、さらなり。親めき、あはれなる事さへすぐれたるを、涙おとして、誦しさわぎしかど、「女の、え知らぬことまねぶは、憎きことを」と、うたてあれば、漏らしつ。

(「乙女」(二二八一〜四〜六))

(四) 院の御前に、浅香の懸盤に、御はちなど、むかしに交りてまゐるを、人々、涙おしのごひ、あはれなるすぢの事どもあれど、うるさければ書かず。

(「若菜上」(三三三七〜一〇〜一二))

(カ) まうで給ひし道は、ことくしくして、わづらはしき神宝、さまぐに所せげなりしを、かへさは、よろづの遣通を尽くし給ふ。いひつゞくるも、うるさく、むつかしき事どもなれば。

(「若菜上」(三三三四〜八〜一〇))

玉上琢弥氏は「源氏物語評釈」で次のように言っておられる。

「男方が主だ。女は興味がないものが多く参加できないものもある。いま読者に男ばかりの遊びを話したとて何になる。語り手にも興味はなく、聞き手にも興味はない。省略にしかずである。」

(ク) きじ一枝たてまつらせ給ふ。おほせ言には、何とかや。さや

うのこと、まねぶに煩らはしくなん。

(「行幸」(三〇七〜二))

物語は、当時、「三宝絵詞」に見られるように、女のものであった。このことに関して玉上氏は次のように述べておられる。

「政争」を描き出すこと、それは、作者にとつて、重大な問題であつたので、彼（「宇津保物語」の作者）は今までの物語の方法を既に超えてしまつてゐることに気がつかなかつた。女のための、女の物語であるという意識も、何時の間にか稀薄になつてしまつた。あの「仲忠が童生ひ言ひおとす人」を憎み、この「宇津保物語」をこよなく愛読した清少納言が後半の部分で批評して、「殿うつり（筆者注、藏開のことであらう）困ゆづりはにくし」（二〇一段）と言つたのも、まさにかような意味においてであつた。それは、現代人の目で見れば、物語の非常な発展、非常な変容、非常な深化であつたけれども、当時の目、すなわち女のための女の物語という立場で見ると、余りにも明白な失敗であつた。

(「物語文学」)

柴式部は、物語が女のものであるということを十分に意識してゐたのである。であるから当時の女が関与すべきものでなかつた、政治、漢詩等を「女の、まねぶべき事にしあらねば」と省略の方法を用いて省略してしまつたのである。

C、ストーリーを煩雑にするものの省略

(ク) 惟光、「いさゝかの事も、御心にたがはじ」と思ふに、おの

れも限なきすき心にて、いみじくたばかり、惑ひ歩きつゝ、強ひて、おはしまさせそめてけり。この程の事、くだくしければ、例のもらしつ。

(「夕顔」(一)三五五11~13)

(イ)、「女房の下らんに」とて、たむけ、心殊にせさせ給ふ。又、うちくにも、わざとし給ひて、こまやかに、をかしきさまなる櫛・扇多くして、幣など、いと、わざとがましくて、かの小柱もつかはず。

逢ふまでのかたみばかりと見し程にひたすら袖の朽ちにける  
かな

こまかなる事どもあれど、うるさければ書かず。

(「夕顔」(一)七三16~一七四5)

(ウ)、「この御中どものいどみこそ、怪しかりしか。されど、うるさくてなむ。」  
(翁氏と頼中)

(「紅葉賀」(一)二九八10~11)

(ロ)、「命婦の君、御供になりにければ、それも、心深うとぶらひ給ふ。くはしう言ひつゞけむに、ことくしきさまなれば、漏らしてけるなめり。」

(「賢木」(一)四〇二16~一四〇三2)

(イ)、「馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、いと、かすかに、いで立ち給ふ。さるべき所く、御文ばかり、わざとならず、うち忍び給ひしにも、「あはれ」と、しのぼるばかり書き尽し給へるは、みどころもありぬべかりしかど、その折の心地のまぎれに、はかしくしうも、聞き置かずなりにけり。」

(「須磨」(一)一三一~4)

(ウ)、「いと物うくて、いたう、ふかして、おはしたれば、女御、「かく、かすまへ給ひて、立ちよらせ給へる事」と喜びこそえ給ふさま、書きつゞけんも、うるさし。」

(「須磨」(一)二一6~8)

(イ)、「さまく書きつくし給ふ言の葉、思ひやるべし。」

(「須磨」(一)三二1)

(ウ)、「月頃の御物語、泣きみわらひみ、「わか君の、何とも世を思さで物し給ふかなしさを、大臣の、あけくれにつけて、思し嘆く」など語り給ふに、たへがたく思したり。尽きすべくもあらねば、中く片端も、えまねばす。」

(「須磨」(一)五〇4~8)

(イ)、「かすしらぬ事ども、きこえ尽くしたれども、うるさしや。ひが事どもに、書きなしたれば、いと、をこに、かたくなしき入道の心ばへも、あらはれぬべかめり。」

(「明石」(一)七六2~4)

(ロ)、「げに、今日をかぎりに、この落を別るゝ事」など、あはれがりて、くく、しほたれ言ひあへる事どもあめり。されど、「何かは」とてなむ。」

(「明石」(一)九一2~4)

(イ)、「彼の大武の北の方、のぼりて、おどろき思へるさま、侍従が、うれしき物の、今しばし、まち聞えざりける心浅さを、恥づかしう思へる程などを、いますこし、問はず語りもせまほしけれど、いと、頭いたく、うるさく、物憂ければなむ。今又も、ついであらむ折に、思ひ出で、なん聞ゆべきとぞ。」

(「蓬生」(一)一六〇8~11)

(ウ)、「……あはれとだに、おぼしおけよ」など、こまやかにきて

え知らせ給ふことおほかれど、かたはらいたければ、書かぬなり。

(「藤袴」(四一〇四1~3))

(四) その年の十一月に、いと、をかしき児をさへ、抱き出で給へれば、大将も、「思ふやうにめでたし」と、もてかしづき給ふこと、限りなし。その程の有様、いはずとも、思ひやりつべきことぞかし。

(「真木柱」(一五四9~11))

(四) 中納言殿よりも、宮よりも、折過ぐさず、とぶらひ聞え給ふ。うるさく、何となきこと多かるやうなれば、例の、書きもらしたるなめり。

(「榎本」(四三七三14~16))

(四) 「火、あやふし」など、言ふも、いと、心あわたゞしければ、帰り給ふ程、いへば、更なり。「いづくにか身をば捨てんと……」

(「浮舟」(四二七一1~3))

(四) 物語の姫君の、人に盗まれたらむ朝の様なれば、くはしくも言ひつゞけず。

(「蜻蛉」(四二七七5~6))

物語を進め行く時に、ストーリーと関係のないもの、また、あつても書くほどでないものを、柴式部は意識的に省略したのである。そして、物語の冗長散漫さを避けたのである。どうしても避けられない時には、「まことや。騒がしかりし程の紛れにかき漏らしてけり。」(「須磨」(四三四14))と言ひわけをして、六条御息所との話を書き、「よしなしごと、いと、多かりや。」(「行幸」(四八八

13)と、本題たる裳着の記事を離れてしまったことを弁解するのである。

2、どのように省略したか……作者の態度による分類

A、単純省略型

(四) (兵部)……(源氏)……(王命婦)そのついでに、いと多かれど、さのみ書き続くべき事かは。

(「賢木」(四三七八14))

(四) 「げに、今日をかぎりに、この潜を別るゝ事」など、あはれがりて、口く、しはたれ言ひあへる事どもあめり。されど、「何かは」とてなむ。

(「明石」(四九一2~4))

(四) (内大)……(夕霧)……(柏木)つきくりに、みな、順流るめれど、酔ひのまぎれに、はかしくからで、これよりまさらず。

(「藤裏葉」(四一九〇2~3))

(四) (源氏)……(夕霧)女房など(も)、多くいひ集めたれど、とゞめつ。

(「幻」(四二二15))

(四) (源氏)……(導師)人く(も)、おほく詠みおきたれど、もらしつ。

(「幻」(四二二167))

作者は、(四) (四)における省略について、その理由を述べるが、読者に対して省略の方法用いたことについての作者自身の気持ち、態度をいっさい現わさない。このような省略の方法を「単純省略型」と名づける。



B、いへば更なり〴〵省略型

㉞、この春よりおほす御ぐし、厄そぎのほどにて、ゆらくとめでたく、つらつき・まみの薫れる程など、いへば更なり。

(「薄雲」(四)二二〇5-7)

㉟、わたり給ふ儀式、いへば更なり。

(「若菜上」(四)二四六7)

㊱、このほどの儀式なども、まねびたてんに、いと更なりや。

(「若菜上」(四)二八二15-16)

㊲、かたぐのひとだまひ、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束・有様、いへば更なり。

(「若菜下」三三〇8-10)

㊳、けかけたる金の筋よりも、墨つきの、うへに輝く様なども、いとなむ珍らかなりける。軸、表紙、箱のさまなど、言へば更なりかし。

(「鈴虫」四七八7-8)

㊴、「火、あやふし」など、言ふも、いと、心あわたゞしければ、帰り給ふ程、いへば、更なり。

(「浮舟」(四)二七一1-2)

昔物語では、先に述べたように、読者が既知であるか、未知であるかを問わず、事物を並びたててことをよくやった。これに対して、後に触れるが、紫式部は「うるさし」「くだくだし」と常々考えていたのであった。あたりまえのこと、いまさら作者が言わなくても読者はよく知っている物について「いへば更なり」と省略したのである。これが「いへば更なり〴〵省略型」である。

読者が既知の物であるから省略するという態度で省略したものに

は、㉞(㉞以外に次のものがある。

㉞、(源氏<sup>(1)</sup>の消息)さまぐ書きつくし給ふ言の葉、思ひやるべし。

(「須磨」(四)三三1)

㉟、その年の十一月に、いと、をかしき鬼をさへ、抱き出で給へれば、大将も、「思ふやうにめでたし」と、もてかしづき給ふこと、限りなし。その程の有様、いはずとも、思ひやりつべきことぞかし。

(「真木柱」(四)一五四9-11)

㊱、物語の姫君の、人に盗まれたらむ朝の様なれば、くはしくも言ひつゞけず。

(「蜻蛉」(四)二七七5-6)

C、消極的弁解省略型

㊲、さるは、かやうの折こそ、をかしき歌など、出で来るやうもあれ。さうぐしや。

(「賢木」(四)四〇三2-3)

㊳、馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、いと、かすかに、いで立ち給ふ。さるべき所ぐに、御文ばかり、わざとならず、うち忍び給ひしにも、「あはれ」と、しのぼるばかり書き尽くし給へるは、みどころもありぬべかりしかど、その折の心地のまぎれに、はかぐしうも、聞き置かずなりにけり。

(「須磨」(四)一三1-4)

㊴、尽きすべくもあらねば、中ぐ片端も、えまねばず。

(「須磨」(四)五〇7-8)

(四)、彼(の)大武の北の方、のぼりて、おどろき思へるさま、侍従が、うれしき物の、今しばし、まち聞えざりける心浅さを、恥づかしう思へる程などを、いますこし、問はず語りもせまほしけれど、いと、頭いたく、うるさく、物髪ければなむ。今又も、ついであらむ折に、思ひ出で、なん、聞ゆべきとぞ。

(「蓬生」(四)一六〇八―一〇)

(四)、(源氏)……(院のうへ)……(帥の宮)……(令泉)との給はする御有様、こよなくゆゑしくおはします。これは、御わたくしざまに、うちくの事なれば、あまたにも流れず、やなりにけん。又、かき落してけるにやあらむ。

(「乙女」(四)三一八―一〇)

(四)、ましていとゞ、玉をしける御前は、庭よりはじめ、見どころ多く、みがきまし給へる御方々の有様、まねびたてむも、言の葉足るまじくなむ。

(「初音」(四)三七七―七八)

(四)、その夜の歌ども、唐のも大和も、心ばへふかうおもしろくのみなむ。例の、事たらぬかたはしは、まねぶも、かたはらいたくてなむ。

(「鈴虫」(四)八七―七九)

(四)、げに、かく、賑はしう、花やかなる事は、見るかひあれば、物語などに(も)、まづ、言ひ立てたるにやあらむ。されど、くはしうは、えぞ、数へ立てざりけるとや。

(「宿木」(四)六五―一四)

当然、書くべき事柄であるが、しかし、事情——才能がない、その時の気分がすぐれない等——によって残念ながら書くことはでき

なかつた。だから省略をしたという省略の方法が「消極的弁解省略型」である。

#### D、積極的心情語省略型

(1)、うるさし系

(四)、「女房の下らん」とて、たむけ、心殊にせさせ給ふ。又、うちくにも、わざとし給ひて、こまやかに、をかきさまなる櫛・扇多くして、幣など、いと、わざとがましくて、かの小桂もつかはず。

逢ふまでのかたみばかりと見し程にひたすら袖の朽ちにけるかな

こまかなる事どもあれど、うるさければ書かず。

(「夕顔」(四)一七三―一七四)

(四)、この御中どものいどみこそ、怪しかりしか。されど、うるさくてなむ。

(「紅葉賀」(四)二九八―一〇)

(四)、いと物うくて、いたう、ふかして、おはしたれば、女御、

「かく、かづまへ給ひて、立ちよらせ給へる事」と喜びきこえ給ふさま、書きつゞけんも、うるさし。

(「須磨」(四)二一―六)

(四)、かずしらぬ事ども、きこえ尽くしたれども、うるさしや。ひが事どもに、書きなしたれば、いとゞをこに、かたくなしき入道の心ばへも、あらはれぬべかめり。

(「明石」(四)七六―七四)

(四)、(源氏)……(頭中將)……(右大弁)心々に、あまたあめ

れど、うるさくてなん。

(「松風」(四二〇〇)3)

(ウ)、軒のしづくもくるしさに、濡れ〜、夜ふかく、出で給ひぬ。時鳥など、かならず、うち鳴きけむかし。うるさければ、えこそ聞きも留めぬ。

(「螢」(四二四8)10)

(エ)、かゝる所の儀式は、よろしきだに、いと、事多く、うるさきを、かた端ばかり、例の、しどけなくまねばんも、「中〜にや」とて、こまかにも書かず。

(「梅枝」(四一六8)10)

(オ)、古き世の一の物と名ある限りは、みな、つどひまるる御賀になんあめる。昔物語にも、物得させたるを、かしこきことには数へつゞけたれど、いとうるさくて、こちたき御なからひのことどもは、えぞ、数へあへ侍らぬや。

(「若菜上」(四二七4)9)12)

(カ)、院の御前に、浅香の懸盤に、御はちなど、むかしに交りてまゐるを、人々、涙おしのごひ、あはれなるすぢの事どもあれど、うるさければ書かず。

(「若菜上」(四二七4)9)12)

(キ)、かゝる折節の歌は、例の、上手めきたまふ男たちも、中〜、出で消えて、「松の千年」より離れて今めかしきこと、なれば、うるさくてなむ。

(「若菜下」(四三三3)8)10)

(ク)、まうで給ひし道は、こと〜しくて、わづらはしき神宝、さま〜に所せげなりしを、かへさは、よろづの遣通を尽くし給

ふ。いひつゞくるも、うるさく、むつかしき事どもなれば。

(「若菜下」(四三三4)8)10)

(ケ)、花盛りにて、四方の霞も、眺めやるほどの、見所あるに、唐のも、大和のも、歌ども多かれど、うるさくて、たづねも聞かぬなり。

(「椎本」(四三四5)6)

(コ)、中納言殿よりも、宮よりも、折過ぐさず、とぶらひ聞え給ふ。うるさく、何となきこと多かるやうなれば、例の、書きもらしたるなめり。

(「椎本」(四三七3)14)16)

(2) //かたはら痛し//系

(カ)、あはれなる御遺言ども、多かりけれど、女の、まねぶべき事にしあらねば、この片端だに、かたはら痛し。

(「賢木」(四三七6)3)4)

(キ)、「いとあるまじき……中略……おぼし嘆くべき事にも侍らず」など、すべて、多くの事どもを、きこえ給ふ。かたはしまねぶも、いと、かたはらいたしや。

(「薄雲」(四二六3)9)

(ク)、「……いと、うらやましく、妬きに、あはれとだに、おぼしおけよ」など、こまやかにきこえ知らせ給ふことおほかれど、かたはらいたければ、書かぬなり。

(「藤袴」(四一〇三)10)14)3)

(3)、//むつかし//系

(ウ)、多かめりし事ども、かうやうなる折の、まほならぬ事、かずくに書きつくる、「心地なきわざ」とか、貫之が諫め、たぶるゝ方にて、むつかしければ、とゞめつ。

(「賢木」(四〇八五〜四〇九一))

(イ)、まことや、かの見物の女房たち、宮のには、みな、気色ある贈物ども、せさせ給うけり。さやうのこと、委しければ、むつかし。

(「胡蝶」(四〇一四〜六))

(ウ)、(1) 〃うるさし〃系、(ウ)

(4)、〃ことごとし〃系

(ウ)命婦の君、御供になりにければ、それも、心深うとぶらひ給ふ。くはしう言ひつゞけむに、ことごとし、きさまなれば、漏らしてけるなめり。

(「賢木」(四〇二六〜四〇三二))

(イ)、わざとの御学問はさる物にて、琴・笛の音にも雲井を響かし、すべて言ひつゞけば、ことごとし、うたてぞなりぬべき、人の御様なりける。

(「相壺」(四三、四三、12〜14))

(5)、〃うたてし〃系

(ウ)、おとゞの御をばさらなり。親めき、あはれなる事さへすぐれたるを、涙おとして、誦しさわぎしかど、「女の、え知らぬことまねぶは、憎きことを」と、うたてあれば、漏らしつ。

(「乙女」(二八一〜四))

(ウ)、(4)、〃ことごとし〃系、(イ)

(6)、〃煩らはし〃系

(ウ)、きじ一枝たてまつらせ給ふ。おほせ言には、何とかや。さやうのこと、まねぶに煩らはしくなん。

(「行幸」(七〇一〜二))

(ウ)、〃見苦し〃系

(ウ)、(宰相)……(蕙)……(衛門督)……(大夫)……(匂)……作りける文の、面白き所〜うち誦し、大和歌も、ことにつて多かれど、かうやうの酔ひの粉れに、まして、はかしくしきことあらんやは。片はし書きとゞめてだに、見苦しうなん。

(「総角」(四三九〜五))

(8)、〃くだくだし〃系

(ウ)、惟光、「いさゝかの事も、御心にたがはじ」と思ふに、おのれも限なきすき心にて、いみじくたばかり、惑ひ歩きつゝ、強ひて、おはしまさせそめてけり。この程の事、くだくしければ例のもらしつ。

(「夕顔」(一三五〜13))

(9)、〃さがなし〃系

(ウ)、ね泣きがちに、いとゞ、おぼし沈みたるは、たゞ、「山人の、赤き木の実ひとつを、顔にはなたぬ」と見え給ふ。御そ目などは、おぼろげの人の、見たてまつり許すべきにもあらずか

し。くはしくはきこえじいとほしう、物言ひさ、がなき様なり。

(「蓬生」(二四一五―一四六二))

(10) 〃殊更めく〃系

例、寄り居給へりつる真木柱も茵も、名残匂へる移り香、言へば、いと、殊更めきたるまで、ありがたし。

(「東屋」(甲一六〇―一七四))

先の(3)、消極的弁解省略型と異なり、作者は省略したことについて積極的に理由を述べている。理由の中心となっているのは、〃うるさし〃〃かたはら痛し〃〃むつかし〃〃ことごとし〃〃うたてし〃〃見苦し〃〃くだくだし〃〃さがなし〃〃殊更めく〃の作者の心情語である。省略せずにはいられない作者の気持ちに明確に表現される語だ。このような省略の方法を「積極的心情語省略型」というのである。

「どのように省略したか……作者の態度による分類」として四つの省略型を考えてきた。これらの四つの省略型は、個々ばらばらのものではない。当然、省略をする時の作者は、D、積極的心情語省略型を常に意識の根底に持っていたであろう。これを意識の底に持ちながらも、その時々々の態度によって、ある場合には、単純に、ある場合には、言いわけがましく、ある場合には、思った通りに、省略をしたのであろう。

#### 四、結 語

「字津保物語」などのような昔物語の一つの方法であった、事物をたくさん並べて書くという方法を用いなくて、省略してしまうということは、確かに、現実の世界との関連を薄くすることである。このことは、紫式部が、夕顔の巻で次のように言っていることからもうかがえるのである。

かやうの、くだくしきことは、あながちに、かくろへ忍び給ひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、「などか、帝の御子ならむからに、見ん人さへ、かたほならず、ものほめがちなる」と、つくりごとめきて、とりなす人もし給ひければなむ。あまり、ものいひさがなき罪、さりどころなく。

(二一七四―一七四一)

つまり、〃くだくしきこと〃は〃つくりごと〃めかないために必要なものである。しかし先行諸物語には、あまりにも余分な記述が多すぎたのであろう。紫式部からは、それらが〃うるさし〃〃むつかし〃〃ことごとし〃〃うたてし〃……と思われたのである。〃くだくだしきこと〃を書けば、物語は、必然的に冗長散漫になるのである。そこで紫式部は、最少限必要な、物・事柄をのぞいては、筋を進める上において不必要なものを省略の方法でかたづけってしまったのである。そして、煩雑さ、冗長散漫さのない物語にしようとしたのである。

螢の巻に見られる物語論や蜻蛉日記の冒頭に見られる物語論を通して、紫式部等の物語観を知ると同時に、彼女等が昔物語を乗り越えようとしていた姿を我々は知ることができよう。道綱の母は、日記によって、紫式部は、新しい方法を用いて越えようとしたのである。紫式部の一つの方法として省略の方法があったのである。

#### 参考文献

- 五十嵐力氏著 「平安朝文学史」
- 玉上琢弥氏著 「物語文学」
- 清水好子氏稿 「源氏物語評釈」
- 清水好子氏稿 「物語の文体」(国語国文18巻四号)

(静岡県立清水西高校教諭)